

憲法と子育て・教育を考えるつどい



前川喜平さん



司会

青木英二さん
東京の教育を考える校長・教頭
経験者の会
三浦久美子さん
都立高校の今を考える全都連絡会

開会あいさつ

子どもたちへの尊敬を 子どもの声に耳を傾けて



教育子育て九条の会 事務局長
佐藤学さん (教育学者)

コロナ禍のもと、開催が危ぶまれましたが、入場制限90名という中でこのように開くことができ、お礼申し上げます。

教育子育て九条の会は2008年に私を含む13人の呼びかけ人によって発足しました。

会は毎年、全国交流集会を開き、その時々々の課題に即して意見交流をし、次の年に備える活動をしてきました。

12月17日に、文科大臣と財務大臣の間で35人学級の実施の合意が成立しました。実は私も前川さんを含め教育研究者12人のグループで30人学級の運動をすすめてまいりました。12月18日に、22万891筆の署名をかかえて、少人数学級の実施見送りに抗議の申し入れをしましたが、その前日に情勢が急展開し、実施となりました。

小学校だけですが5年間かけて35人学級を実施しま

す。ほとんど生徒の自然減で対応するという非常に不十分ではありますが、40年間動かなかった義務教育標準法を改正して実施するという点では、私たちの運動の大きな一歩と言えます。文科省も「大きな声のひろがりが出た」と言っておりました。

なぜ急に動いたのか。

2021年1月から始まる国会で次年度の予算の審議が行われますが、戦後初めて軍事費が文教予算を超えます。とんでもないことで、もはや日本はかつての日本ではない。まさに「戦争しない国」から「戦争できる国」へ突っ走っている。私の個人的見解ですが、35人学級実現は、そういう状況を反映していると思います。

さらには、菅内閣の支持率があまりにも後退するのを止めるために、「教育も考慮していますよ」というメッセージを発する必要があったのではないかと、私は理解しています。

私が大学に入った1970年当時を思いおこすと、防衛費は政府予算の1%までと歯止めがかかっていた。一方、文教費は10%を超えていた。つまり文教費と軍事費の比率は10対1であったのに、今日それが逆転したのであり、大変なことです。

今後、政府は憲法改悪に向かってすすむでしょうが、その第一歩が学術会議への攻撃です。

昨日、「安全保障関連法に反対する学者の会」で日本学術会議についてオンラインシンポジウムを行いました。なんと直後の視聴者数は7000人でした。あっという間に5万人を超えるでしょう。そのくらいの広がりを見せています。学者の会のHPで明日から無料で見られるようになりますので、ぜひご覧いただきたいと思います。

この問題に振り回されましたが、まずは学会の声明を上げたいと専念しました。現在は1000近い声明が上がっています。今、日本には私たちが考えている以上に大きな変化が起こっています。そういうことを受けとめな

がらすすんでいく必要があります。

さて、今日は『子どもたちをよろしく』の映画を上映しますが、時宜にかなったものと思います。

なぜかという、新型コロナのもとで、最も重いものを背負わされ苦しんでいるのは、子どもたちです。

ユネスコの報告を追ってみているのですが、貧困層や社会的経済的に不遇な子どもたちが新型コロナで受けている精神的、健康的、教育的なダメージは、通常の子どもの平均より5倍です。困難を抱えた、弱者と言われる子どもたちが、特に学ぶ権利が剥奪され尊厳が奪われている。この問題は重要だと思えます。

日本は、シングルマザーの子どもの貧困率が世界一高いことは知られていますが、この6、7月のシングルマザー世帯の約半数は収入がゼロだったそうです。

教師にとって何が一番大切かと問われますが、私は「子どもたちに対する尊敬」だと言います。これを失うと教育は成り立たなくなる。今必要なのは、子どもの声に耳を傾けること、どの子どももひとりにはしない、そういうことを追求していく必要があると思えます。

きょうは前川さんにこの映画の解説をお願いできるということで、よい一日になることを願っています。

映画 『子どもたちをよろしく』

企画：寺脇研・前川喜平 監督・脚本：隅田 靖

中学2年生の洋一は父親と2人暮らし。母は家を出てしまい、父はガス・電気を止められてもなお、雇用主から借りた金をパチンコで使い果たしてしまうギャンブル依存症。

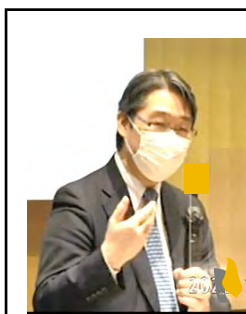
稔は、彼をいじめる同学年の4人グループの1人。父親が再婚相手の娘（稔の義姉）に性暴力をふるい、稔はひそかに慕う義姉が風俗で働いていることを仲間知られ、今度は自分がいじめられるのではと怯える。彼はどうしようもない苦しみを狂ったように洋一にぶつけるが、その後、何かを察した稔は洋一を探して街中を走りまわります。

しかし間に合わず、洋一は橋から身を投げて自殺してしまう。学校もいじめグループの子どもたちも「いじめはなかった」とシラを切るが、稔は「洋一をいじめたのは僕です。いじめにより洋一は自殺しました」と発言。フェイドアウトして「子どもたちをよろしく」のタイトルが流れる。



どう変える？ これからの子どもの学び、学校、地域

“コロナ” にうち勝ち、子どものいのちと学ぶ権利を守る



学びの本質、教育の本質を失わずに

前川喜平さん

現代教育行政研究会代表
元文部科学事務次官

社会のひずみが子どもたちに

私は、この映画をハッピーエンドで終わらせたかったのですが、寺脇研氏に言わせると「それは現実ではない」と。

いじめている稔も非常に不安定な精神状態で、父親から毎日のように暴力を受け、唯一の救いは血のつながらない義姉の優樹菜だが、その姉からも一緒に逃げることを拒否される、そういう心の動揺がいじめという行動につながっています。

この映画には学校が出てきません。文部官僚だった寺脇と前川がつくったから、学校を悪く言わないのだろうという、うがった見方をする人もいますが、そういうことではありません。学校だけの責任ではない、家庭や地域にもそれぞれに問題がある、特に家庭の中は見えないので、それを可視化しようというのがねらいでした。

お母さんには逃げられてしまい父親はギャンブル依存症で貧困の極みという洋一は、最後にいのちを絶ってしまいます。彼の家庭には居場所はなかったが、例えば週に1回でも暖かいご飯が食べられる子ども食堂みたいなものがあれば、あるいは学校の中に誰か、担任でなくても養護教諭とか用務員さんとか、誰かが寄り添ってくれる人がいたら、ちがっていたかもしれません。

「子どもたちをよろしく」というタイトルは、映画をご覧いただいた一人ひとりが何かできるのではないでしょうかと問いかけを、寺脇さんと監督の隅田靖さんが考えたものです。監督の隅田さんの少年時代の情景も投影されているものです。

この映画で言いたかったことは、社会のひずみがいろいろなところに及んでいくが、最後には一番弱い立場の子どもたちが最も苦しむ、どうしていいかわからない子どもたちに及び、それがいじめや自殺という形で表れてくるといことです。

この映画に出てくる大人たちも、本当にどうしようもない大人ばかりです。でも大人たちが悪い、親が悪いと言って攻めてもしかたがない。「親学」などでは解決できないし、学校で道徳教育をやれば解決できるというものでもありません。子どもをとりまく環境、学校や家庭・地域にどれだけ大人たちの目があるか、受けとめる大人があれば、ということです。

弱い大人たち、彼らもなんらかの依存症

映画に出てくる大人たちは、悪い大人ではなく弱い大人。それぞれ何らかの依存症なんです。

アルコール依存症、ギャンブル依存症、DV だって依存症ですし、DV の夫に頼ってしまう妻も依存症です。依存症という病気であり、彼らも救いが必要なんです。

洋一の家族も稔の家族も5年前はどうだったかという、それぞれ幸せだった時期があった。洋一は彼が見つめている写真のように、両親と3人の幸せな家庭がありました。稔もそれぞれの親がシングル同士で再婚したの

ですが、かつて父親は優しかった。それが株で失敗して財産を失い自暴自棄になった。ある意味、資本主義の犠牲になったと言ってもいいかもしれません。だから優樹菜は父親にむしろ同情しており、一緒に出ていってしまう。なぜ、優樹菜がああひどい父親と出ていくのか、納得できない方もいると思いますが、演じた女優さんに言わせると「この選択しかない」というのです。

一斉休校は“人災”

貧困、いじめ、DV など、これが新型コロナウイルスの中で深刻化しているだろうと思います。職を失った親もたくさんいるはずで、貧困が拡大していることはまちがいない、その中で、ストレスもたまり虐待も増えるであろうと思います。

さらに「一斉休校」、私はこれは“人災”“アベ災”だと思っています。憲法で保障されている子どもの教育を受ける権利、生存権まで脅かされた。

内閣総理大臣が科学的根拠も法的根拠もなく一斉休校を打ち出したことに対して、情けなかったのは、99%の教育委員会が思考停止の状態唯々諾々と従ったことです。本当に休校が必要だったかという、ほとんど必要なかった。

休校のせいで、もともとあった貧困や格差が拡大したと思います。文部科学省は通知を出して、家庭で学習させよと。いわば、「学校の家庭化」、「家庭の学校下請け機関化」が起きたのです。

学校は課題をたくさん出しました。時間割までつくって配った学校もある。しかし、余裕のある保護者と余裕のない保護者がいます。ある調査(朝日新聞デジタル版)では、子どもの学習を見ているのは母親が46%、父親が4%であわせても50%。裕福な家庭では家庭教師が来るとか、早稲田アカデミーみたいにオンライン授業をする塾もあります。しかし、誰も勉強を見てくれなかったという家庭が34%ある、学校から宿題が出されても、3人に1人の子どもはほったらかしだったということです。

東京は3月2日から休校に入って、5月末まで、登校日もなく完全な休校をしてしまった。6月になってから分散登校を始めましたが、都立学校が完全に再開したのは6月29日です。ほぼ4か月の休校とは、本当にばかげた話であって、東京といっても新宿や渋谷みたいなところばかりではなく、檜原村とか小笠原村もある。小笠

原は領土という意味では日本ですが“海外”で、感染者は一人もいなかったのです。小笠原高校で4か月も休校したなんて本当にばかげています。

休校で学習の格差が生じたことはまちがいありません。家に閉じ込められた子どもたちがゲーム障害を起こしたケースもあるでしょう。困窮家庭で、学校給食が唯一の栄養という子どもたちが3、4か月も給食を食べられないのは生命の危機だといえます。

虐待に関しては、児童相談所の相談取り扱い件数が、この10年間毎年増えています。今年の1~3月の件数は去年の件数に比べて1~2割近く増えています。ところが4月にはほとんど去年と同じ、5月にはむしろ少なくなっているのです。ちょうど休校が長期化したところで、虐待が増えていたであろう時期です。どうしてか。

虐待が減ったのではなく見えなくなったのです。

学校からの通告が減り、幼稚園、保育園なども登園自粛などにより、通告が減っている。病院も小児科に子どもがかからなくなった、こういうところからの通告が激減している、逆に警察からの通告は増えているという深刻な事態です。

児童虐待が深刻化したけれど潜在化したと言えます。

子どもたちにとっても、保護者にとっても大変な災難であったと思います。

学校というのは、単に学習するだけでなく、そこで子どもたちが生活する、生存権を保障する場でもあります。一斉休校はそういう子どもたちの人権を侵害したということでした。安倍さんたちはそういう意識を持っているのかというと、全く持っていないと思います。

降って湧いたように9月入学案が持ちだされましたが、4月入学を9月入学に変えるのは大変なエネルギーが必要で、そんな甘いものではない。5月の約1か月は「9月入学狂騒曲」みたいなばかげた議論がされましたが、消えました。浅はかな政治家の思いつきに振りまわされる教育行政も学校も本当に気の毒です。

学校が再開された後の子どもたち、教職員も受難が続いています。学校の中での感染防止対策で、三密を避け、手をあらう、消毒など、教職員の負担も大変です。子どもたちにフェイスシールドをつけさせる学校もあつたり、傘をして登校させソーシャルディスタンスをとる学校も

あります。やればやるほどいいかもしれませんが、どこまでやればいいのか。

科学的に考えリーズナブルな範囲でやればいいのかと思います。感染症対策としては、教職員に定期的なPCR検査をすればいいと思います。生きたちから感染させることがないように、あとは三密を避けるために、学級の少人数化をすすめることだと思います。

柔軟で最適な方法を学校現場で

来年度は小学1年生と2年生が35人学級になります。が、コロナ対策としての少人数化は別途考えなければいけません。目下の課題としての少人数化のために、文科省が今の学級編制の考え方を思い切り弾力化して、加配の先生を学級担任にして学級数を増やし、学級規模を小さくするとか、です。また私は、特別支援学級と通常学級を一体化してインクルーシブの少人数学級にすることも、学校現場で柔軟にできるようにしたらいいと思います。文科省はいいとは言わないと思いますが、最適な方法を学校現場で考えればいいのかと思います。

できるだけ学習集団の人数を少なくすることを考えていけばいいと思います。

もう一つは、授業時数にこだわらないことだと思います。もともと学校教育法施行規則には年間の授業時数の標準が書いてあります。標準には上下の幅があつていい。マイナス10%ぐらいでもいいと思つているんです。

しかもあいにくなことに、今年度は新しい学習指導要領の本格実施の初年度で、小学校6年生の年間標準授業時数は1015時間。10年前の2010年まではゆとり教育の時代で945時間だったので、10年前に比べて70時間も増えているのです。週に2コマ増えているわけです。今年に限っては10年前の標準授業時数を目安にすればいいのではないかと思います。

授業時数のしぼりにあまり捕らわれないほうがいいと思います。毎日6時間授業、7時間目も授業、夏休みも削って、運動会も修学旅行も削って授業となると、これはある意味、学校による教育虐待ではないか。家庭での教育虐待では、子どもが勉強しないと言って、最後には子どもを殺してしまうような痛ましい事件もありました。

休校で失った時間を取り戻そうとすることは、かえってよくない。今年度は、自殺も不登校も急激に増えるのではないかと思います。

子どもの権利条約の第 31 条に、「休息・余暇の権利」がありますが、遊ぶ権利、ゆっくりする権利もあるわけですから、まちがっても学校による教育虐待をしないようにしたいと思います。

教育の本質を失わずに

オンラインの教育は休校期間中、一定の成果を上げたと思います。文科省が GIGA スクール構想を打ち出していますが、これは経産省の「未来の教室」だとか「Edtech」だとかと一体化しているものでちょっと危ないなと思っています。最近の文科省は、「経済産業省文部科学局」と言われたりしていて、経済産業省にかなり牛耳られている。特に安倍内閣は「経産省内閣」などと言われていましたから。

経産省発のポリシーが文科省に降ってくると、民間教育産業がつくったプログラムをそのまま公教育に当てはめればいい、教師はいらない、AI のほうがすぐれているみたいな話になって、個別最適化は AI のほうができるなんていうことになりかねない。

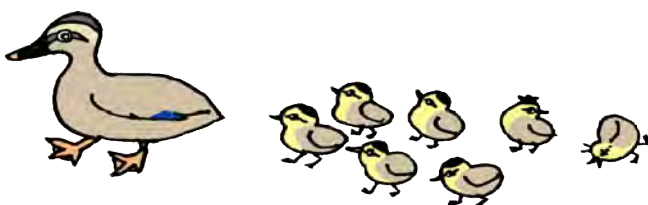
教師と生徒、生徒同士のかかわりあいの中で学びがすすんでいく。そういう教育の本質を失ってはいけないと思います。

萩生田さんという人は思想的には全く相容れないのですが、少人数学級をすすめるにあたっての不退転の決意は評価します。安倍さんの一斉休校にも抵抗したんですよ。それから対面授業を大事にするというのも評価します。それ以外はしませんが。

オンラインについては、光と影をよく見極めていく必要があります。不登校の子どもたちがオンラインだったら参加できるということがあったのは成果だと思います。

私は夜間中学のお手伝いをしていますが、教育の機会を逸してしまった、あるいは現在不登校などの人たちのために、通信制の義務教育という形態があってもいいのではないかと思います。そういうことを考える機会にもなったのかなと思っています。

どうもありがとうございました。



子どもたちの願いからの 出発を

井出里美さん

登校拒否・不登校を考える東京の会



不登校の親と特別支援学級介助員の立場からお話したいと思います。全国の子どもたちから寄せられた「つぶやき」の資料をお配りしました。

学校には自由がない

もう 19 年も前になりますが、小学校に入学して直ぐに息子は「母ちゃん、学校には自由がないんだよ。ぼくは休み時間ゆっくり絵を描きたいのに、先生は外で遊ばなくちゃダメって言うんだ。休み時間なのに・・・」と言いました。

4 年生のときには、友だち関係の悩みを「先生に相談したら？」と言った私に、「あのね、先生は毎日泣く子や喧嘩をする子の話を聞いたりしてすごく大変なんだよ。それなのにぼくまで相談したら先生病気になるちゃうよ。だからいいんだ、ぼくは我慢するから」と答え、その翌年の 5 年生の春、学校に行かれなくなりました。

息子は当時の思いを、「この先自分はどうなるんだろう、とすごく不安で苦しかった。あの頃はとにかく何も考えずゆっくり休みたかった」と言っています。

そして 3 ヶ月ほど前。私が勤務する小学校では、たった 2 週間余りの夏休みを終え、2 学期が始まりました。

2 年生の A 君は少し遅れてお母さんと登校し、下駄箱の前で「帰る」と泣きながらお母さんにしがみついています。「夏休み中、『コロナだから』と、楽しみにしていたお出かけは我慢してずっと家にいたのに、『じゃあ何で学校はコロナでも行くの?』って混乱しているみたいです。」とお母さんは話していました。

また、11 月頃から「学校に行きたくない」との訴えが出始めていた、場面緘黙傾向のある 6 年生の B さんは、つい先日「帰りたい」と訴え、担任の先生が「理由は？」と、ことばでの説明を求めたときに、「裏のことばができません」とつぶやきました。絞り出すような声でやっと発したその一言に、「心の奥にある、ネガティブな思いがことばになりません」との彼女のしんどさが込められてい

る気がしています。

6年生のC君は、昨年度の卒業生に「今度はお前がリーダーだから、がんばれよ」と学級を託されたものの、運動会も宿泊学習も中止となり、リーダーとして頑張っていること、そしてそれを通して成長している自分を実感できないまま2学期が終わろうとしている今、家で「頑張らなきゃ！頑張らなきゃ！」と言いながらトイレや布団に引きこもり、欠席することが多くなってきました。

私には、今こうして学級の子もたちが表わしているものと、わが子が不登校になったときの不安や苦しみとが、共通しているように思えてなりません。

「つぶやき」は子どもたちからのメッセージ

私たち登校拒否・不登校を考える東京の会では、不登校の子どもたちの心に近づき、そこから大事なことを学ぶために、2017年にわが子がふともらしたつぶやきを集め、1冊の冊子にまとめました。

「学校ではいつでも笑ってなくちゃダメなんだ。でも、今はいろいろなことが心配で笑えない。だからまだ学校には行かないよ」「勉強で競争するのに疲れたんだ」

「ぼくは、ぼくのままでもいいんだよ」

こうしたたくさんのつぶやきは、今の管理的・競争的な学校が、子どもたちの安心を奪い、自分自身が壊れてしまうほどの恐怖や不安、ストレスを感じる場になっていることを訴える、子どもたちからのメッセージです。

そして、そこから自分を守るために家に助けを求めた子どもたち、それが不登校の子どもたちです。

子どもたちは今、マスク・手洗い・ソーシャルディスタンスなど、いくつもの感染予防対策が日々の生活の中で不可欠となり、たくさんの「楽しみ」も制限されている中、エネルギーの源である「安心」と「日常」が脅かされている、まさにわが子が不登校になったときと同じ危機的状況なのだと思います。

そんな不安や緊張、ストレスを抱えた子どもたちにとって今必要なのは「安心できる人と場所、そして日常」だと思います。不登校の子どもたちにとって、「家」が安心の場所になることは、命の危機から救われるほどに重要なことですが、現実にはそれは決して容易なことではありません。なぜなら、今の学力重視・評価と競争の教育の中で、子どもにとって何が大切かを見失ってしまうほどに親自身が追い詰められているからです。

私は息子が不登校になった当初、学校から課題が届くたびに、学校に行かれない分、家でやらせなければ！との重圧から、息子を随分と追い詰めてしまいました。そうやって「やらせなければ」と私が、がんばればがんばるほど、息子の具合はどんどん悪くなっていきました。

そして、勉強やその他の何よりも「わが子の命」が大事だと、そう思えるまでの私自身の大きな葛藤を経て、やっと息子は、「家族でご飯を食べたり、TVを見て笑ってもらえる。そんな何でもないことが幸せなんだよね」と言える安心した日常を取り戻したのです。

一斉休校中に、子どもたちの心身のケアのためではなく、学力重視の観点から、家庭での「オンライン学習」や膨大な課題が出され、「家庭の学校化」が行われた地域がありました。

そして今、コロナ禍を理由に「教育のICT化」を一気に進める動きもありますが、私はこの「教育のICT化」が、「家の学校化」を招き、子どもの心身、さらに親子関係をも壊すことにつながる危険を感じています。

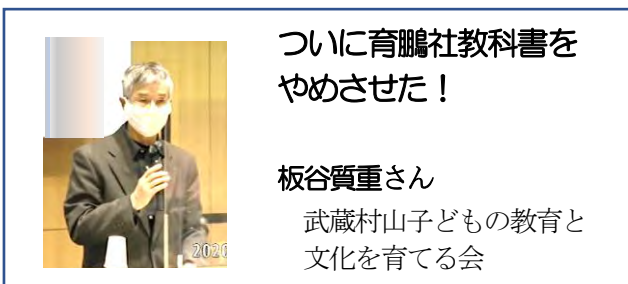
また、「教育のICT化」の目的とされている「個別最適化学習」は、子どもたちの「安心」の回復に必要な、「人との関わり」を学校から奪い、さらに、友だちや先生との共感関係によって深まるという「学びの本質」からも大きくズレていく危険がないか心配です。

定時制高校で「勉強が分かるから学校は楽しいんだよ。先生は『いつでも質問していいよ。引きとめて聞いていいよ』って言うてるんだ」と言った子。少人数の別室登校で「今まで全てに投げやりだったAさんが、今日、自分から先生に質問したんだよ」と言った子。不登校で途絶えていた先生や友だちとの関りを、こんな風に、嬉しそうに話す子どもたちから私は「ああ、やっぱり人は、人との関わりの中で安心し、成長していくんだなあ」と、そう実感しました。

また、小学校でいじめを受け不登校を経て定時制高校に入学したある子は、「俺のクラスはいろいろな人がいるから居心地がいいんだ。競争社会ではいじめは無くないよ」と言いました。義務教育の9年間、授業や行事を通して、様々な考えや個性に触れ、お互いの違いを認め合いながら、共に育ち合う場。それが公教育が本来なすべきことであり、今問うべきは、コロナ禍でそこをどう保障するかなのではないのでしょうか。

真実は必ず子どもたちの中にあります。

今こそ子どもたちの声や姿、願いから出発して、みなさんと考え、実現していきたいです。



今年の武蔵村山の教科書採択では、多くのおみなさんのご支援・ご協力で、9年間使い続けてきた育鵬社教科書を不採択にさせることが出来ました。有り難うございました。

学習、宣伝、あらゆるとりくみを展開

私たちは、コロナ禍でもまず学習が大事と思い、学習が出来る会場を探しましたが、どこもコロナ禍で閉鎖していました。6月になり、教科書展示会が始まった頃ようやく、会場を確保出来ました。お忙しい梶谷陽子さんに講師をお願いし、午前中の早い時間でしたが28名の参加者で、緊急教科書学習会を開き、教科書展示会への参加とアンケート記入を呼びかけました。展示会には91名の参加、104枚のアンケートが書かれました。

教科書採択会議の会場は、当初、傍聴者20名ほどのものを用意していました。「都教委も育鵬社を不採択にした今は、武蔵村山は注目されている。都内や近隣市からも傍聴者は来る。全員入る部屋を用意しろ」と文書で要請、電話やメールで何度も要求しました。

採択日10日前の8月7日に、ようやく広い部屋を用意してくれました。その部屋は千人も入る市民会館大ホールでした。小さいよりはよほど良いと考え、もっと傍聴者を集めようと、電話をかけ、猛暑の中一週間、市内を宣伝カーで駆け回り一生懸命傍聴参加を訴えました。

当日は、市・内外から88名の傍聴者が駆けつけてくれました。

会議はホール舞台壇上で行い、傍聴者はバラバラに座って舞台を見物する感じでした。

M前教育長のときは、育鵬社を採択するため強引に会議を進め、各教育委員も緊張して意見を言っていました。今回はどの委員も、のびのびと「教科書のどこが良

いのか」を発言し、全員一致で帝国書院に決定しました。

「良かったね。今までの取り組みの成果だ」「長い闘いだったけど、本当に良かった。」と、9年間の長い闘いの成果をみんなで喜び合いました。

経過を少し振り返ると、2011年8月5日、育鵬社を採択した最初の会議は、どの教育委員もこの会社の教科書が良いのか、誰も言わずに休憩になり、前教育長、M氏は休憩中に育鵬社教科書を含む全教科書を事務局に印刷させ、会議再開後、「横暴だ、やり直せ。」の声も無視して全員一致で決めてしまいました。

M氏は都教委から派遣され武蔵村山の教育長になり、武蔵村山を安倍教育再生機構の実験場として教育を進めていました。

指示命令で動く上意下達の学校体制、学校選択制や2学期制、道徳の文科省指定校、学力テストや漢字検定などの差別選別の競争教育をすすめ、さらに文科省に先駆け、小・中学生に礼儀作法や、領土問題のパンフ等を作成し指導を強要しました。また、次回育鵬社の採択をねらい「日本がもっと好きになるという」育鵬社宣伝パンフを全中学生に配布しました。そして2015年の採択会議でも強引に育鵬社教科書を採択したのです。

努力し続ければ山は動く

私たちはそれまでの取り組みを見直し、教科書採択への取り組みを強めるために、学習、ニュース、宣伝が大事と決めました。それまでの年1回の教育市民集会から、2~3か月に一度の例会を開き、教科書のこと・指導要領のこと・学校での子どもの様子など、講師を呼んで学習し運動をすすめてきました。

教育市民集会と例会は9年間で約40回開き、延べ参加人数は2000人以上になります。

毎月出している育てる会ニュースの他に、教科書採択時や市民集会のお知らせとして教育問題や戦争法反対などを訴えるビラを合計7回、総数15万枚以上を市内全戸配布しました。

三多摩労連や市内民主団体、都教組組合員や共産党などの応援をいただき、多いときには50人ぐらいの方が集まり、全戸配布の応援をしてくれました。

育てる会は様々な教育問題の要望書を市教委に提出し回答を要求しました。

保守的な武蔵村山も、これらの取り組みの中で少しずつ変化しました。私たちの運動が大きくなるとともに、市教委は少しずつ要求を受け入れるようになってきました。

2018年の市長選では、教育行政の批判をおそれた市長は、M教育長を辞めさせ現在の教育長に替えたのです。

私たちの運動の成果が、今実ったのです。「努力して続ければ山は動く」です。これからも指導要領改善・少人数学級実現・教員の大幅増員・変形労働時間制反対等の取り組みをすすめようと思います。



コロナ禍の学校の様子

ある小学校では、一斉休校明けの第1週目は1、2時間で下校、2週目3週目はクラスを2つに分けて午前・午後の二部授業、それ以降はほぼ正常に戻りましたが、影響は今も続いています。家庭科の調理実習はまだできません。音楽はマスクを着けてハミングだけ。リコーダーは最近やっと10分間だけできるようになりました。

また、密を避けるために全校集会は2つに分けてやり、休み時間は、10分休みを1、3、5年生、昼休みは2、4、6年生と分けています。保護者会も授業参観もできません。学校、教師、保護者の連携が困難になっています。

教師の負担も非常に大きくなっています。

休校明けは午前・午後の2回の掃除、消毒も大変でしたが、今も毎朝早出して、8時からの検温チェック。区主催の復習テストのために補習もします。コロナに感染した児童が出た場合、こまごまとした報告書を書いて区に出さなければなりません。

でももちろん最大の被害者は子どもたちです。この間、教育委員会からの至上命令は進度の回復で、夏休みを短縮し、7時間授業をしたりして、進度は追いつきつつあります。が、身についているかどうかは何とも言えません。特に貧困層の家庭の子どもにしわ寄せがきています。

最大の問題は、行事が全くと言っていいほど行われて

いないことです。子どもたちはストレスがたまり、不登校も増えています。コロナ対策の基本は、人と人との接触を避けることです。しかし子どもたちは、行事などで教師や子どもたち同士と一緒に行動し、触れあう中で成長します。発達の機会を奪われた子どもたち、学校にはほとんど感染がない中で、また文科省と専門家会議の反対も無視しての、アベ一斉休校措置のマイナスの影響は計り知れません。

教職員の出番 教職員九条の会の連絡会を

葛飾教職員九条の会についてです。資料をご覧ください。第1次安倍内閣が退陣して、当面の危機が去ったということもあって、いつしか開店休業になっていました。しかし第2次安倍内閣が、特に集団的自衛権の行使を容認するに及んで、9条が危ない、なんとかしようという声が起こり、休眠状態から覚め、学習会や駅頭宣伝を行ってきました。

3年前に、安倍首相が突然、憲法に自衛隊を明記すると言い、それに伴い3000万署名が提起されました。

私たち九条の会はこれに呼応して、区内のいくつかの九条の会に呼びかけ、2017年の11月からこれまで、「葛飾九条合同アクション」として毎月2つの駅で交互に宣伝を行っています。きのうも2時からの19日国会行動の前に、寒風吹きすさぶ中、元気に区民に訴えました。国会行動にも3人が参加しました。

また、毎年成人の日には、数百人の新成人に「9条守ろう」のビラを手渡しています。

コロナで駅頭宣伝ができないあいだ、何かできないかと思っていた時、「検察庁法改正案に抗議します」というツイートが500万というニュースを見て、これならできると、慣れない手つきでツイッターにもとりくみました。

また、スタンディングをしようと声が起こり、2、3日で様々な準備をし、10人が参加しました。共感を寄せてくれた人、遠くから署名を書きに来てくれた人、飛び入りスピーチをした人もあり、勇気づけられました。

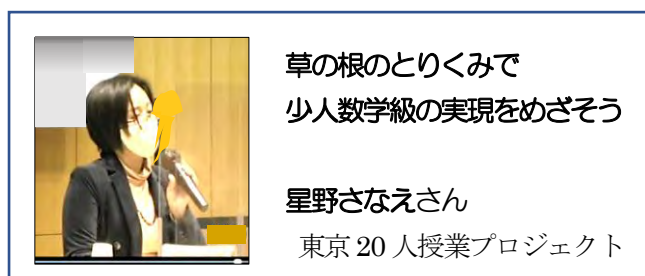
都知事選では、足立区市民連合に合流して、宇都宮健児さんの応援を行いました。情勢の求めに応じて、9条の枠を超えて機敏にタイムリーな行動が出来てよかったです。

ステイホームの間に、特に教職員OBの役割について考えてみました。

まずは、教組に対して、場合によっては財政的援助や書記局のお手伝いなども必要ではないかと思っています。そして、退職教職員の会の高齢化に伴う世話人や会員数の減少も大きな課題です。なんとかしなくては。

今こそ、「教え子を再び戦場に送るな！」のスローガンで頑張ってきた私たち教職員の出番です。しかし、現在活動中のところは少ないので、教職員九条の会連絡会ができないか、とりあえず準備会を、と思っています。社会的な運動として、選挙で教え子その他にメッセージを送るのもいいと思います。担い手が2倍3倍増えれば一変し、世直しが進んでいくのでは、と思います。

偉そうにいろいろ言いました、失礼しました。



少人数であればこそ手厚い手だてが

東京日野市で、少人数授業・少人数学級を求めて「東京 20人授業プロジェクト」という活動をやっております。保護者の有志として東京都に対して「コロナの緊急対策をとってください」と、6月からオンライン署名を始めました。

私には小学校3年生の娘と小学1年生の息子がおります。コロナで学校の先生方も大変になっていますし、子どもたちも新しい動きに翻弄されて疲れやストレスが溜まっています。毎日のたくさんの宿題や土曜日の授業、夏休みが2週間しかなかったことも本当に大変でした。

一方、下の子どもが特別支援学級で6人のクラスですが、本当に子どもの個性に向きあってもらっています。子どもは多動を抑える薬を飲んでいるのですが、その副作用で、朝起きた時どうしてもボーッとしてしまい、朝ご飯が間にあわないこともあるのですが、そんな時はパンを持たせて行き、学校で食べさせてもらったり、ていねいに見ていただいており、とても感謝してます。

特別支援学級ということで、少し特殊な事例であるかもしれませんが、要するに少人数であればこそ、子ども

の発達や個性に応じた対応が可能になると実感しています。

こういう状況の中で、私たち保護者の有志で、東京都知事や東京都教育委員会に独自のオンライン署名を届けて要請し、地元の日野市教育委員会にも要請し懇談をしてきました。国も5年をかけて小学校のみ35人クラスというところまでは決めました。都議会でも、自民党が代表質問でとりあげるなど、少人数学級の世論と流れは確かなものになってきていると思います。

しかしコロナの中で、子どもたちの心と学びの危機であって、緊急的な課題であるという実感を持っている市民はまだ多くないと感じています。

もっともっと草の根でつくっていくために、地元で学校の先生たちと市民の懇談会を行って、課題を共有しながら、世論をひろげようと取り組んでいます。先生たちからは、子どもたちがコロナの中でいろいろな変化に疲れていること、楽しみにしていたイベントが中止になったりで我慢ばかりを強いていることが話されました。

子どもたちは突然の一斉休校と今の対応との矛盾にも、おかしいと思っています。

一方で、学校以外での、家庭での様子や放課後子ども教室など、様々な場面での子どもたちの様子を、先生と保護者と市民とで交流しています。お手元にニュースをお配りしましたので、ご覧ください。

もっと早く、もっと少人数で！

5年後に小学校のみ35人学級になるというのは、社会的には大きな前進ですけれども、当事者からは不十分です。3年生の娘に言わせれば、「私卒業しているし、関係ないじゃん！」ということです。今まさにコロナの中で大変な思いをしている当事者に、5年かけて実施というのがどういうメッセージとして落ちるでしょうか。

私たちは今後も、国に対して、もっと早く、もっと少人数でと、声をあげるように活動していきます。

もともと、義務標準法などの制度を変えるだけでなく、自治体のコロナ緊急対策を含めて要請してきましたので、これからも、東京都に対する要請や、地域で世論と仲間づくりをひろげる草の根の活動を続けていこうと思っています。



質問にこたえて 前川喜平 さん

○ 映画のタイトルの「よろしく」の対象はだれか
● 観た人に対してです。最後にもう一度タイトルが出て来たのは、寺脇さん、隅田さんの意図であり、観た人に何ができるか考えてほしいということです。

○ なぜ学術会議のメンバーはかつての滝川事件のように辞表を出すなどして、抗議の意思を示すことが出来ないのか。

● メンバーに聞いていただきたいのですが、強い行動をとっている学者さんもうらっしゃると思います。今の会長の梶田さんは、いい人なんだけれど学術会議の会長としてはちょっと頼りないなあ。菅首相と科学技術担当大臣に言いくるめられて、学術会議の組織の問題にからめとられるのではないか。組織についての議論の前に、「6人を任命せよ。違法な任命拒否を撤回してから、すべてはそのあとだ」と言うべきです。腰砕けになってしまうのではないか、大丈夫かなあと思います。

○ 少人数学級の実現について、財務省の壁はやはり厚いようだ。これを突破するにはどうすればよいか。

● とにかくたくさん声をあげ続けるしかないと思います。今回はたくさん声があがったことが力になったのはまちがいありません。知事さんや市長さんからもそういう声があがってきた。国民が望んでいることが政治家に感知されれば、政党を問わずやらなければという気持になると思います。自民党の中にも、文部科学大臣経験者の中にも、まだまだ少人数学級はいらないという人もいました。第7次教職員定数改善計画をやった時に、文科省は「少人数学級よりも少人数指導のほうがいい。特定の教科だけ子どもの数を少なくする」という考え方でした。でもこれは無理矢理そう言っていたので、本当は少人数学級のほうがいいのです。

今回、もう一つの条件として、財務省が財政規律を主張できなくなってきたこと。今年の予算はとんでもない赤字国債を発行し、1、2、3次の補正予算を加えると100兆円を超える赤字です。こんなことは今後とてもできない。毎年こんなことをやっていたら、日本の財政は破綻

します。少なくとも今年は財政規律ということが封じられていた、だから少人数学級はダメとは言えなくなった。文科省はこの機会を掴まえてすすめたのだと思います。

欲を言えば小中学校で実施ですが、とりあえず5年間で小学校を35人学級に。その次は当然、3年間で中学校に、その次の段階では30人と、少人数化をすすめていったらいいと思います。

○ 「個別最適な学び」と「協働的な学び」は両立するか。また「主体的対話的で深い学び」とはどう整合性をつけるのでしょうか。

● 私にはわかりません。(笑)

こういう言葉が躍っていますが、あまり惑わされないほうがいいと思います。少なくとも「個別最適化」とは経産省が言い始めた言葉ですから、要注意だと思います。

民間教育産業のAIを使った教材を使えばいい、AIに任せておけばいい、子どもたちが今何を勉強すべきかはAIに選ばせればいい、AIが選んだ課題を子どもたちに与えておけば、子どもたちは最適な勉強をすることになる、そうなれば先生はいらない、という話になる。

AIで学習ができるのか、これは学習の本質を外している話です。AIが先生の代わりになるはずがない。学びとは何かということです。

「協働的な学び」とか「主体的対話的で深い学び」は従来から文部科学省も使っていますが、いずれにしてもこういう言葉にあまり振り回されないほうがいいと思います。子どもたちにどのような学びが一番望ましいかは、それぞれの学校で、先生たち自身が考えることだと思います。

○ 2022年度の都立高校の入試から、全生徒に20分のスピーキングテストをやることになっていますが、採点はベネッセに丸投げであり、中止要請をしています。

● ベネッセに丸投げは問題だと思います。英語の学習でスピーキングが大事なのはまちがいないと思いますが、それを民間に任せるということに問題があると思います。文科省も、というか下村さんですが、大学入試でも共通テストに英語の民間試験を盛り込もうと考えました。

どういうやり方でやるかはありますが、スピーキングをどう評価するかという問題は残ると思います。高等学

校の現場で知恵を出していただきたい。英語の4技能は必要だと思います。本当の意味でICTが発達すれば、スピーキングテストをICTで出来るかもしれません。

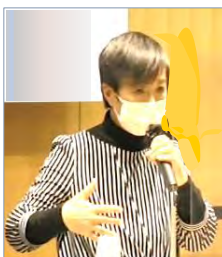
いずれにしても、課題としては残っていると思います。ただ、こういうことをきっかけに、民間教育産業が公教育にはいつてくるのは危険だと思います。



アピール案の提案・採択

川上千恵さん

三多摩子育て・教育問題連絡会



閉会あいさつ

集まれるのがうれしい！ 子どもたちを危険から守ろう

教育子育て九条の会 呼びかけ人

池田香代子さん (翻訳家)

皆様、お疲れ様でした。

こうして集まれるだけでも、胸がいっぱいになるような、本当に異常な1年でした。子どもたちにとっては、全国一斉休校という未曾有の体験をして、特に彼らにとって重みのある、学年度末と学年度初めを奪われたんですね。私の姪は小学6年生でした。教室に、卒業まで登校日があと何日というカウントダウンが書いてあったのですが、「22」と書いてあったのが翌日になったら「2」となっていた。本当にかわいそうでした。

お話にもありましたが、科学的なエビデンスも何も無い。北海道でやったら評判がよさそうだからと安倍さんがやったのでしょ。「やってる感」しかない内閣でしたよね。それと権力をふるう快感なんではしょうか。どうして子どもたちを標的にするんでしょう。昔のテレビ番組の、幼稚園バスをねらうジョッカーみたいに子どもたちをねらう。一斉休校にしてもおそらく経済的保障をしなくていいからでしょう。

安倍さんは2012年に、失意のどん底にあった時に、大阪で大阪教育条例関連の日本会議の会議に招かれ、そ

こで持ち上げられて元気になって、年末にまた政権奪取した。大阪でスピーチしたときに、「政治が教育に口をはさめないなんて、そんなことがありますか」と発言したんですよ。教育基本法を変えたんだというおごりがあったのでしょね。その勢いで育鵬社の教科書がどんどん採択されていきましたが、今回終息するような動きでよかったと思います。

年末になって少人数学級が飛び込んできた。これもよかったと思います。でも、マイナンバーカードに小学校からの成績を記録させるという話が出ています。まだ意味がよくわからないんですが。子どもたちのことを、私たちが目を光らせていないと、何をされるかわからない。

それからきょうの映画、みなさんいかがでしたでしょうか。あの家庭がこのコロナの中にあつたらどうだろうかと考えて、背筋が寒くなりました。

この映画を観るのは3回目です。最初観たときはあのお父さんが遊びたい人、一攫千金で儲けたい人に見えたんですけど、違うんですね。というのは、先日、依存症の回復者の方とお会いして、認識が変わったのです。薬物依存症の俳優の高知東生(たかちのぼる)さんと、買い物依存症とギャンブル依存症の田中紀子さんです。

あのお父さんは、奥さんに出ていかれるようなことがあって、心に傷がついて、いやなことつらいことが頭の中を回転していて、ギャンブルしている時だけそれが止まるんです。

また、古谷経衡(ふるやつねひら)さんという方をご存じですか。教育虐待について『毒親と絶縁する』(集英社新書)を書いた。そしたら、それを読んだ、古谷さんと同年輩、アラフォーの政治学者・五野井郁夫さんが「今しがた教育虐待をした親と絶縁してきた」とツイートした。今話題の教育虐待も、ひろくは教育子育て九条の会に関係することですので、注目していきたいと思います。

安倍さんが終わってよかったと思ったらもっとひどい政府で、失望と怒りで力が抜けそうですが、未曾有の1年を終えるにあたって、これからもがんばっていきましょうね。

そしてみなさん、よいお年をお迎えください。

きょうは皆さんとお会いできてうれしかったです。

ありがとうございました。

アピール

憲法を生かして、コロナ禍にうち勝ち、子どもたちの幸せと平和な社会を

映画『子どもたちをよろしく』は、いじめや自殺など、子どもたちの苦しみや絶望の背景に横たわる貧困や家庭の崩壊、社会の闇を告発しています。

ユニセフ（国連児童基金）の調査（2020年9月3日）によれば、日本の子どもの「精神的幸福度」は、自殺率の高さなどからOECDやEU諸国38カ国の中で37位と報告されています。

学習指導要領のしぼりや「学力」競争、細かな生活管理のもとで、子どもたちや教職員は追い立てられています。こんな中、新型コロナウイルス感染症の広がりを受けて、安倍前首相が文部科学省や教育委員会にもはからずに発した全国一斉休校は、突然子どもたちから「学び、遊び、ふれあい」の権利を奪い、保育園・学童保育など地域にも混乱をもたらし、貧困・格差や家庭の困難などさまざまな矛盾を露呈させました。

“コロナ”前の学校に戻すのではなく、これを機会に、少人数学級でゆとりある学習の場を、友だちや異年齢の中でふれあいや自治を学ぶ場を、教職員には一人ひとりの子どもたちに目が行き届き、働きがいのある学校を創りだしましょう。

保育園や学童保育、公園や文化施設などが、子どもたちにとって豊かな体験と成長の場になるような、地域づくりにとりくみましょう。

自民党など「改憲」を意図する人たちは、コロナに対する市民の不安を利用し、憲法に“緊急事態条項”や“いのちを守る自衛隊”を書きこむことをねらい、また、「敵基地攻撃能力」の保持をかかげるなど、憲法をなし崩し的に破壊し、「戦争する国」への道をすすもうとしています。

菅政権による日本学術会議新会員の任命拒否は、学問・研究の自由の侵害にとどまらず、政府の意に沿わない市民の思想・表現・行動の自由を抑圧し、「改憲」への動きと軌を一にするものです。

しかし今、市民の声、子どもたちの思いが、社会を動かす力としてひろがっています。

侵略戦争を正当化する育鵬社の教科書が、全国各地の自治体で相次いで不採択になりました。

日本学術会議への政治介入に反対し撤回を求める声が、学問・研究、教育、芸術・文化、地方自治体などあらゆる分野から沸き起こっています。

子どもたちが安心して、のびのびと学び育つことのできる学校や地域、青年が希望をもって生きられる社会をつくろうと、とりくみがすすめられています。

憲法と民主主義が大切にされる政治をめざして、市民と野党の共闘がねばり強くすすめられています。

今こそ、「改憲」をおしとどめ、9条をはじめ憲法を守り生かして、コロナ禍にうち勝ち、子どもたちの幸せと平和な社会をつくるために力をあわせましょう。

2020年12月20日

「憲法と子育て・教育を考えるつどい」参加者一同

「憲法と子育て・教育を考えるつどい」東京実行委員会

- 青木 英二（東京の教育を考える校長・教頭（副校長）経験者の会）
安達三子男（全国民主主義教育研究会）
川上 千恵（三多摩子育て・教育問題連絡会）
児玉 洋介（東京総合教育センター）
星野 泰良（九条の会東京連絡会・葛飾教職員九条の会）
前田 裕子（婦人民主クラブ）

教育子育て九条の会 呼びかけ人

- 池田香代子（翻訳家）
池辺晋一郎（作曲家）
上原 公子（元国立市長）
尾山 宏（弁護士）
香山 リカ（精神科医）
佐藤 学（教育学者）
田中 孝彦（教育学者）
暉峻 淑子（経済学者）
藤田 英典（教育学者）
堀尾 輝久（教育学者）
槇枝 元文（元日教組委員長・故人）
三上 満（元全教委員長・故人）
山田 洋次（映画監督）